

1年を振り返って (新しいロータリーに向かって…)

国際ロータリー第2660地区 ガバナー **四宮 孝郎**
(大阪西南RC)



昨年12月に中国武漢市で初の症例が確認された新型コロナウイルス感染症は、1月16日に神奈川県において日本でも初感染者が報告され、以来その猛威は瞬間に全国に広がり、今や第二波・第三波が懸念されるに至っています。当然のことながら、その影響はロータリー活動にも及び、4月・5月はほとんどのクラブで例会が休会となり、ロータリーの原点である「親睦」と「奉仕」の機会が減少する日常が続きました。

シカゴのエバンストンにある国際ロータリーの本部においても、550名の職員のうち8名に感染者が出て以来完全リモートワークになり、現在も継続されています。6月初旬に予定されていた国際大会の開催が中止となったことは、115年に及ぶロータリーの歴史でも例を見ない事態でした。

「1年を振り返って」の寄稿文での冒頭が、このような文章で始まるとはつい半年ほど前には思いもよらぬ事でした。誰しもが経験する事がなかった日々刻々と変わる状況下において、当地区内の各行事・会合も中止又は延期を余儀なくされ、周到な準備をされてこられましたホストクラブ・担当ロータリアンの皆様には、多大なるご迷惑をお掛け致しました。

しかし、そのようなコロナ禍が続く中、「ロータリークラブとして、ロータリアンとして何かをしなければ」との思いが湧き起こり、日々変わるニーズに対応しながら数多くの「支援プロジェクト」が実施されました。ロータリーの精神がどのような状況下であっても強く保たれ続けられているものと確信した次第です。

それではここで昨年度前半を振り返ってみたいと思います。

7月16日より始まり11月20日で終えた公式訪問では、地区内80クラブを訪問させて頂きましたが、例会前の会長・幹事・理事役員の方々と懇談会において各クラブの現状をお聞きし、それぞれの地域における活動を肌で感じる事ができました。その後の例会運営も各クラブで創意工夫がなされており、個性溢れるものでした。地区ビジョンに掲げているように各クラブが個性豊かな活動・運営をされ、さらに魅力を増していかれることを期待しております。

12月13～14日に開催された地区大会は当地区初のRI会長代理を招聘しない大会としましたが、新しい試みとしてフレッシュロータリアン交流昼食会を開催し、当初予想をはるかに超える264名の参加を得ました。ロータリー歴の浅いロータリアンにとって、他クラブの方々と交流は今後のロータリー活動に有意義なものになっていかれるものと思います。今年度の地区大会では主にロータリーファミリーの中でも青少年の方々に焦点を当ててプログラムを組み立てました。ロータリー青少年プログラムへの皆様の理解がより一層深まったとすれば幸いです。

昨年度後半は、新型コロナウイルス禍によりロータリー活動も停滞する事がありましたが、ロータリー財団・米山奨学会への寄付については例年同様にご協力を頂き、感謝の念で一杯です。

又、心配された年度末(6月末)での退会者数が少なかったこともクラブ内での友情の絆が深いものであったからと、改めて感じさせられるものでした。

前年度のRI会長マーク・マローニー氏は新型コロナウイルス禍について次のように述べられました。

「私たち全員が一度にこれを経験することになるうとは夢にも思いませんでした。今回の危機で私たちが示した柔軟性と適応性が今後もロータリーが変化し続けるのを可能にするということです。」

今私たちは新しいロータリーの「かたち」に向かってのスタートラインに立っていると言えるのかもしれませんが。

もちろんロータリーの中核的価値観に代表される根幹は、今も昔もこれからも全く変わりませんが、その運営形式・方法は従前とは違ったものが当然求められています。各クラブの事情を鑑み、WEBを利用した例会等諸行事の運営方法や奉仕活動の在り方、独自の災害支援基金等の創設もその一例でしょう。

簡ガバナー年度が始まりはや3ヶ月が経ちましたが、新型コロナウイルス禍の収束への道筋が未だ見えない中、各クラブにおかれましては新しいロータリー活動の「かたち」を模索されている事と思います。

どのような「かたち」であっても私達ロータリアンの心と心の結びつきはこれからも変わりなく深いものであり、各クラブが益々充実した運営をなされ、発展されていかれる事と確信致しております。

この1年間で出会う事ができたすべてのロータリアン・ロータリーファミリーの皆様へ感謝を込めて、月信最終号のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。